

『古新聖經』の研究 [論文要旨及び審査の要旨]

著者	余 雅
発行年	2018-03-31
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第690号
URL	http://hdl.handle.net/10112/13401

[31]

氏名	余 雅 ^{よがてい} テイ
博士の専攻分野の名称	博士（文化交渉学）
学位記番号	東アジア文化博第33号
学位授与の日付	2018年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	『古新聖經』の研究
論文審査委員	主査教授 内田 慶市 副査教授 中谷 伸生 副査教授 奥村 佳代子

論文内容の要旨

余雅テイ君の学位請求論文「『古新聖經』の研究」はこれまで幻の聖書と言われていた漢訳聖書『古新聖經』の成立と版本間の差異、更には、それがその後の漢訳聖書に与えた影響を論じたものであるが、その構成は以下のようになっている。

序論

第一章 ポアロ『古新聖經』の成立

第一節 ポアロについて

第二節 『古新聖經』の成立過程と諸版本

第三節 『古新聖經』の文体

第四節 『古新聖經』の中国語特徴

小結

第二章 満漢合璧版における『古新聖經』研究

第一節 満漢合璧版の翻訳

第二節 満漢合璧版の訳語的特徴

第三節 東洋文庫の満洲語との比較

第四節 徐家匯版の漢訳との比較

小結

第三章 カトリックによる聖書抄訳と『古新聖經』について

第一節 ディアズの『聖經直解』との関係

第二節 アレーニの『天主降生言行紀略』との関係

小結

第四章 19世紀の漢訳聖書と『古新聖經』について

第一節 『古新聖經』から『神天聖書』

第二節 『古新聖經』から思高本へ

小結 結論

先ず、第一章では、『古新聖經』の成立過程とその各版本について、これまでの研究の成果をふまえて詳細に記述している。また、その中国語の特徴についても、それが北京語を中心とする広義の北方語に属するものという結論を多くの例を挙げて導き出している。

第二章はこれまでほとんど手を着けてこられなかった「満漢合璧版」について詳しく論じている。特に、内田慶市によって初めて全容が明らかになったサンクト・ペテルブルグ所蔵の満漢合璧版の満洲語と中国語を、更に、東洋文庫所蔵の満洲語版、また徐家匯版の中国語と対照させてその訳語の違いと翻訳の方法の違いを指摘し、その成立年代を考察している。

第三章では、『古新聖經』に先行するカトリック宣教師による他の聖書関係の翻訳と『古新聖經』との関係を論じている。取り上げたのは、ディアズの『聖經直解』と、アレニの『天主降生言行紀略』であるが、それらに見られる継承関係を語彙の面から明らかにした。

第四章は、『古新聖經』以降の漢訳聖書、特にモリソンの『神天聖書』との継承関係を論じ、カトリックの聖書翻訳が実はプロテスタントの漢訳聖書にも影響を与えたことが本章で証明されている。

結論部分では、『古新聖經』の翻訳態度とは聖書翻訳の原典主義に適ったものであり、中国文化の受容性を重視したことを強調して論じている。

論文審査結果の要旨

本論文は、これまで長い間「幻の漢訳聖書」と言われていた『古新聖經』について、その成立や言語的特徴、また他の漢訳聖書との継承関係を論じたものである。

本論文で先ず特筆すべきは、これまでの研究では全く扱われてこなかった「満洲語」版について詳しく言及した点である。サンクト・ペテルブルグ蔵満漢合璧版と東洋文庫蔵満洲語版における満洲語とその対訳、つまり漢訳との比較対照はこれまで全く行われてこなかったものであり、これによって、『古新聖經』の成立年代の同定が可能になり、各版本の成立過程まで明らかになるはずである。たとえば、満洲語が先にあったのか、漢語訳が先にあったのか、或いは、東洋文庫版の満洲語訳とサンクト・ペテルブルグ版の満洲語ではどちらが先に成立したのかといった問題である。更には、短期間で満洲語を会得した努力にも賞賛を送りたいと思う。

また、『古新聖經』とそれ以前、それ以降の漢訳聖書や聖書関連翻訳書、たとえば、ディアズの『聖經直解』やアレニの『天主降生言行紀略』との継承関係、影響関係も本論文では明確にされており、漢訳聖書翻訳史研究に大きな貢献をなすものと言えよう。

その他、作者ポアロの翻訳態度に関する立論も、当時のイエズス会の宣教方法やその後のモリソンの翻訳観などのいわゆる「中国同化」「中国文化の受容性を重視した」方法との関連付けも妥当なものである。

ただ、一方で、本論文では漢訳版と満州語版の比較対照に些か紙面を割きすぎた嫌いがあり、肝心の言語分析に若干不満な面がないわけではない。特に、文体論に関しては今後、近代における中国語文体論の中での位置づけなどが課題として残されているが、全体としては優れた論考となっている。

以上のことにより、本論文は博士論文として価値あるものと認める。